

伊吹山フィールドシンポジウム 講演要旨

伊吹山の保全と地域連携—過密度シカ個体群が生息する伊吹山草原の現状と課題

日時：2022年8月21日 10:00-13:00 / 14:30-16:30

場所：滋賀県米原市伊吹山（フィールド観察）/米原市伊吹山文化資料館（シンポジウム）

シンポジウム プログラム

開会の挨拶・趣旨説明 前迫ゆり（関西自然保護機構会長・大阪産業大学）

「伊吹山の草原植生と保全の経緯」 高橋滝次郎（ユウスゲと貴重植物を守り育てる会）

「伊吹山の保全と地域の取組み」 高橋順之（米原市伊吹山文化資料館）

「伊吹山頂草原植物群落における土壌露出被害」 高原泰生（京都大学）

「伊吹山の自然再生のためのニホンジカ対策の課題」 高柳 敦（京都大学）

総合討論

閉会の挨拶 岩崎敬二（関西自然保護機構副会長・奈良大学）

【趣旨説明】

花の百名山の一つとして知られる伊吹山（標高1,377m）は滋賀県北東部と岐阜県との県境にあり、日本海型気候と太平洋型気候の境界に位置する。石灰岩が広く分布、露頭するカルスト地形で、表土が薄く岩が多いといった特有の自然条件が伊吹山の多様な高山植生を支えている。平成15年に天然記念物伊吹山頂草原植物群落として指定された。しかしながら、高山植生に対するシカの採食が顕著になったため、伊吹山を守る自然再生協議会が立ちあがり、平成28年に伊吹山入山協力金などによって、山頂に全長約3キロメートルの植生防護柵が設置された。しかし植生保護柵の破損が顕著で実質的なシカ対策は順調ではなく、高山植生へのシカの採食影響が継続している。

伊吹山の保全は地域、研究者、行政の三者連携が進められていることから、伊吹山における地域のとりくみ、歴史、生態系保全とシカ対策、そして今後の課題などについて情報提供いただく。全国的にも課題となっている植生の保全とシカの順応的管理、地域の活動について議論したい。

伊吹山の草原植生と保全の取組

ユウスゲと貴重植物を守り育てる会 会長 高橋滝治郎

伊吹山はその地理的あるいは地質的な特性などにより古くから豊かな植生を有する山として知られ、滋賀県全域に産するシダ植物以上の高等植物が約2,300種あまりあるうち約1,300種も有していると言われている。927年（延長5年）の延喜式には朝廷への献上された薬草は近江が73種で1番、美濃が62種で2番目に多く、両国にまたがる伊吹山に薬草が多かったことによるものと考えられる。

時代を経て織田信長の薬草園伝説や徳川吉宗の頃の採薬師の調査、明治時代から昭和にかけては牧野富太郎博士の7度にわたる植物調査なども行われ、平成15年には山頂草原植物群落が国の特別天然記念物に指定された。一方でニホンジカの食害は約10年前から急速に拡大し、特に保護が必要な山頂エリア、

三合目エリアに限って獣害防止ネットにより植生保護に取り組まれているものの、これら以外の植生の衰退は極めて深刻で、斜面からの大規模な土砂流出やシカの嗜好植物のみが繁茂する貧相な生態系となっている。伊吹山の植生の魅力と深刻な食害の実情、保全の取組と課題を紹介する。

伊吹山の保全と地域の取組み

米原市伊吹山文化資料館 高橋順之

伊吹山に近い地域に住む人は、里山として「いぶきやま」と呼び、遠くから眺める人は、ヤマトタケルを振り返りにした荒ぶる神の棲む霊山として「いぶきさん」と呼ぶ。滋賀県側南西斜面は、一合目から山頂まで草原が広がっている。江戸時代中期の伊吹山の絵図には、干草を山から曳き下ろす人が描かれていることから、農耕用の牛が耕運機に変わり、化学肥料が多量に出回るようになる昭和 30 年代後半まで、伊吹山での採草が続いていて、山頂は旧測候所あたりまで、風が強くと草が生えにくいところや、急斜面、大きな岩があるところ以外は草刈り場だった。山頂山小屋と測候所跡地の間のくぼ地は盆花取りのために刈らずに残されていた。

柴山は四合目の東側や、堂の谷の上の一带で、四合目の東側の斜面は茅場で、背の高いススキ草原を放置して、良い茅を育て、茅葺屋根の材料とした。このように、伊吹山の自然は、里山として人の手が入ることで維持されてきたのである。さらに、伊吹山麓には、江戸時代後期に築かれた延長 2 キロに及ぶ獣害防止のシン垣がある。牧野富太郎は伊吹山が好きで、度々講習会を行い植物調査の発展に寄与した。近世以降の伊吹山と地域の取組、現在の登山道等の保全活動について紹介する。

伊吹山頂草原植物群落における土壌露出被害

京都大学大学院農学研究科森林科学専攻森林生物学分野（修士課程 2 年） 高原 泰生

伊吹山山頂には植生が失われ土壌が露出した地形（土壌露出とする）が見られる。土壌露出は長期にわたって山頂の草原生態系を損ねる脅威となりうるが、その形成過程は分かっておらず、面積の拡大縮小などの動態についても把握されていない。時間経過に伴う土壌露出の変化を観察し記録することは、今後の植生の回復過程を予測するために必要不可欠である。今回の講演では土壌露出の経時変化について、記録した内容を紹介する。

伊吹山の自然再生のためのニホンジカ対策の課題

京都大学大学院農学研究科森林科学専攻森林生物学分野 高柳 敦

高標高地においてニホンジカによる採食から植生を守るために、おそらく最も早く設置された防護柵は、日光白根山のシラネアオイを守るための電気柵で、1995 年に設置されている。その後、南・中央・北の各アルプスでもニホンジカの植生への影響が大きな問題となっており、高標高地におけるニホンジカの採食による生物多様性の減少・消失は、生態系保全における一つの大きな課題である。

伊吹山は標高 1400m にも満たない低い山であるが、高山帯のようなお花畑が見られ、多雪地でもあって立地環境は高標高地に近い。その伊吹山では 2000 年代後半からシカの影響が大きな問題となり、2012 年には最初の小さな防護柵が設置された。その後、生物多様性の消失が顕著になり、2014 年より大規模な防鹿柵を設置してきている。対策が始まって 10 年近くとなるが、現時点では防護柵でうまく守ることはできていない。その現状と今後の方向性について説明すると共に、高標高地でのシカの影響のコントロールのあり方について考える。